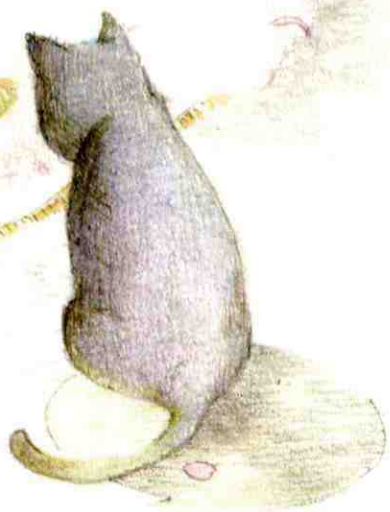


よいのなごりを  
古山 結

絵  
大平  
繭



坂の上に、一本の桜の木がありました。

桜はいつも一人でした。話し相手といえ、たまに通り過ぎる風くらいです。桜の立っている場所からは、町のにぎやかな風景がよく見えました。桜はいつも町の景色を眺めていたので、寂しくはありませんでした。

風の吹かない静かな夜です。その日の晩も、桜は町の灯りを数えて過ごしておりました。すると、どこからか声が聞こえてきます。

「今夜は、すばらしい月夜になった」

桜はびっくりして、枝がざわざざと鳴りました。声の主は、どうやら足元にいるようで、それは一匹の猫でした。その日の晩と同じくらい濃い色の毛並みをした猫でした。猫の前には小さなとっくりと、これまた小さなお猪口がひとつ並べてありました。

桜が夜の挨拶をしますと、猫も目を細めて礼をしました。

「驚かせてしまいましたかな」

と云いながら、猫は少しも悪びれないふうで、

ひげをついと動かしました。そのしぐさがおかしくて、桜は枝を揺すって笑いました。猫はというと、相変わらず空を見上げながら、本当に良い月だ、などと云うのでした。見ると確かにまん丸の月がぼっかりと夜のなかに浮かんでいました。

それから、猫は時々桜のもとへやって来るようになりました。

日が暮れて、月が昇るころになるとふらつと現れて、気がつくといつの間にか姿を消しています。桜はいつしかこの小さな来客を心待ちにするようになっていました。

猫はいつも静かに晩酌をしているだけでしたが、たまにぼつりとする、目玉の片寄ったおかしな魚や、かなしい話がまつわる燈籠のことなどは、桜の知らない町の話ばかりで、そんなとき、桜はじつと耳を傾けています。また、猫と見る月は、不思議といつもよりや

わらかく光るようで、桜を闇のなかにぼうと浮かび上がらせるのでした。

あるとき、それまで黙っていた猫が、ふと思いついたように云ったことがあります。

「私は若いころ、いつかきつとあそこへ行こうと決めていた」

そう云って、猫は懐かしそうに月を見上げました。そのとき、桜は猫の目のなかに、月と同じまん丸の環が浮かんでいるのを見ました。

「それで、月には行けたのですか」

猫はふふつと笑って、いや、行けなかったよと云いました。

どうして、と桜は尋ねました。

「遠いからさ。どんなに高い場所に登っても、月より地面のほうが近かった」

それから、桜の下で、猫は小さな息をもらしました。

「それに、あそこには海がないと聞く。それが

一番の問題だ」

「海が好きなんですわね」

「いや、海を泳いでいるやつが好きなのさ」

しれつと云って、猫はつまみをひとつはお張りしました。



それは、確かに満月の夜であったと桜は今も覚えています。風のあたたかい穏やかな夜でした。



その晩も、猫はやって来ました。

「ずっと考えていたのですが」

桜の声に、猫は顔を上げました。

「この山に立っている私は、ここらで一番月に近いということになりますか。だとしたら、私の体に登れば、月への道が見つかるかもしれません」

自分にはわからないけれど、あるいは猫なら、桜はそう思ったのです。

猫は少し考えるように自分のひげをなでていましたが、やがてこう云いました。

「うん。確かにお前さんは大きい。私よりもずっとだ。だが、月はそんなこともお見通しなのさ。だから大きくても小さくても、同じ分だけ自分の光が届くように、あんなに高いところに行ってしまったんだ。まあ、つまりは誰にとっても月は同じように遠いということなんだが」

それを聞いて、桜はがっかりしてしまいました。すると、足元にぼん、と何かが当たり

ました。覗き込むと、猫が桜の幹に寄りかかって、じっと空を見上げていました。

「それでも、私はこの坂の町に来てしまった」

そう、猫がつぶやくのが聞こえたような気がしました。

「落ち込む必要はないぞ。お前さんが背高のっぽであることには変わりない。いつか月が降りてきたら、真っ先に話すのはお前さんだろう」

そのときはぜひ私をその肩に乗せてくれ、そう云って猫は片目をつぶってみせました。

それから猫は立ち上がると、桜に帰りの挨拶をしました。桜が見送りの挨拶をしますと、猫はひよいと跳ねて、夜の暗闇に消えました。

そのすぐ後のことです。猫が姿を見せなくなっただけです。

桜は坂の上で猫を待ち続けました。しかし、猫は現れませんでした。

夜が何度訪れても、月が幾度まるくなくても、猫は現れませんでした。

気づかぬ間に猫が来ているのではと、足元を見回してみても、やっぱりいません。知らないかと尋ねてみても、風はひと声ひゅうと鳴くだけでした。

桜は猫を思っただけ泣きました。桜の涙がこぼれるたびに、花びらがひとつひとつ散りました。ひとつふたつと散ってゆきました。

季節がめぐって夏となり、再び春がやって来ても、桜は変わらず坂の上に立っていました。桜の周りには、何本もの新しい桜の木が植えられていました。桜はもう一人ではありませんでした。

夜になり、他の木々が眠ってしまったあと、桜はひとり月を見ました。風が吹いたのか、ひらりと花びらがひとつ宙を舞います。薄紅色の花びらは、月の光を受けて白く弾けました。



ひとつ、またひとつと町の灯りが消えてゆき、  
山さえも眠る刻となっても、桜はひとり、起  
きていました。

いつまでもいつまでもひとり、月を見てい  
ました。

もしかしたら、猫は月に行けたのかもしれ  
ない、と思いつながら。

そして、夜の闇の中に、花びらは静かに舞  
い続けています。

この一本の桜が何のためにその花を散らす  
のか、人びとは誰も知りません。

その山の桜が人びとに広く知られるように  
なるのは、それからもう少し後のことです。

さわさわさわ  
ひらりひらり

さわさわさわ  
ひらりひらりひらり



